

Jim Kemeny

# ハウジングと福祉国家 居住空間の社会的構築

ジム・ケメニー——著　　祐成保志——訳

## Housing and Social Theory

### ハウジングは福祉国家の 「ぐらついた柱」か？ それとも「土台」か？

ハウジングを初めて本格的な理論的考察の俎上へのせ、  
現代ハウジング研究の突破口を開いた  
孤高の社会学者ケメニー。初の邦訳。

新曜社  
新曜社

Jim Kemeny



# ハウジングと福祉国家

居住空間の社会的構築

ジム・ケメニー——著 祐成保志——訳

Housing  
and  
Social Theory

HOUSING AND SOCIAL THEORY by Jim Kemeny

Copyright © 1992 by Jim Kemeny

All Rights Reserved.

Authorised translation from English language edition published

by Routledge, a member of the Taylor & Francis Group.

Japanese translation published by arrangement with Taylor &  
Francis Group through The English Agency (Japan) LTD.

息子であり友人であるマーティンに

君が、研究者として取り組むべき課題を明確にしようとすれば、公共的な争点の定式化を公的機関にまかせるのをやめるとともに、私的な困難トラブルについて考えるときに自分ひとりの感覚に頼るのをやめなければならない。とりわけ、自分以外の何者かという通りに、官僚のエートスをもつリベラルでない実用主義や、道徳的に分裂したりベラルな実用主義を受けいれることで、君自身の道徳と政治における主体性を放棄してしまつてはならない。多くの個人的な困難が、たんに個人的な困難としては解決できず、公共的な争点の枠組みのなかで、歴史の形成という課題の文脈のなかで理解されねばならないということを認識せよ。また公共的な争点の人間の意味は、それを私的な困難に、そして個人生活における諸課題に関連させることを通じて解明されねばならないということを認識せよ。社会科学における研究課題は、私的な困難と公共的な争点の双方、そして個人生活史と歴史の双方を含み、さらにそれらのあいだで生じる複雑で変化の余地のある諸関係を含んでこそ、はじめて正しく定式化されるということを認識せよ。個人の生活と社会の形成は、それら諸関係の結びつきをなかで展開する。社会学的想像力は、この結びつきにおいて、現代における人間生活のあり方に一石を投じる可能性をもつものである。

ハウジングと福祉国家

---

目次

序文および謝辞 1

はじめに 5

第1部 ハウジングとメタ理論 13

第1章 ハウジング研究の学問分野としての基盤……………15

1 はじめに 15

2 学問分野の性質について 16

3 都市研究の場合 19

4 社会行政論の場合 20

5 実体的な焦点——ハウジング、ホーム、居住 23

6 学際主義、ハウジング、社会理論 28

7 経験主義と認識の漂流という問題 35

8 結論 37

第2章 ハウジング研究の認識論的基礎……………39

1 はじめに 39

2 基礎的な諸概念 43

3 方法論的諸課題 49

4 概念形成のレトリック 52

- 5 住宅問題とは何か？ 57
- 6 結論 60

第2部 理論の奪還 63

第3章 ハウジング研究における国家への回帰……………65

- 1 はじめに 65
- 2 政治学における国家への回帰論争 67
- 3 ハウジング研究における国家 71
- 4 ハウジング研究における国家論の構築 82
- 5 結論 86

第4章 比較ハウジング研究における単線論の批判的検討……………87

- 1 はじめに 87
- 2 社会理論における単線論と収斂論 90
- 3 比較ハウジング研究における収斂論 94
- 4 結論 105

第5章 ハウジングと比較福祉研究……………107

- 1 はじめに 107



2	福祉研究における三つの変動論	109
3	理論にもとづいた「福祉」概念に向けて	120
4	比較論的視点から見たハウジングと福祉	127
5	結論	135
第3部 比較ハウジング研究における分岐論に向けて		137

第6章 イデオロギーと分岐する社会構造……………139

1	はじめに	139
2	マクロ社会的側面	142
3	ミクロ社会的側面	163
4	結論	173

第7章 社会構造の分岐と居住……………175

1	はじめに	175
2	『持ち家の神話』における分岐論の再構成	176
3	福祉国家と社会構造	178
4	インダストリアリズムの二つの様式——協同志向と私事志向	193
5	結論	201

第8章 コレクティブな居住の政治的構築——スウェーデンの場合…… 204

- 1 はじめに 204
- 2 ヘゲモニーの社会的構築 206
- 3 政治的支配の社会的構築——「居住政策」 216
- 4 国民の家と社会計画 218
- 5 結論 236

第4部 理論にもとづいたハウジングの社会学に向けて 241

第9章 居住と社会構造…… 243

- 1 はじめに 243
- 2 社会構造におけるハウジングの顕現性——埋め込みの概念 244
- 3 社会——空間的焦点としての居住 247
- 4 社会変動の力学と居住 255
- 5 居住の社会学に向けて 259
- 6 結論 261

第10章 終章…… 264

訳者解説——ハウジングの社会学・小史 271

文献 312 (xi)

索引 322 (i)

装幀——加藤賢一

## 凡例

・本邦訳の底本は、*Hansung and Social Theory*, by Jim Kenney (Routledge 1992, Hardcover edition) である。

- ・「」は、原文で引用符の箇所を示す。
- ・『』は、書名・誌名などを示す。
- ・ゴシック体は、原文のイタリックを示す。
- ・〔 〕は、訳者による補足を示す。
- ・（ ）は、原文のままである。
- ・原注は、括弧つきの数字でその位置を示し、傍注として収録する。



## 序文および謝辞

本書を執筆しようと考えたのは、前著『持ち家の神話 (The Myth of Home Ownership)』(Kemeny, 1981) に対する反応に大きな不満を感じたからである。住宅保有形態の問題ばかりが注目され、それによって例証し説明の一助としようとした、分岐論という、より根本的な問題の方は無視されてしまった。一九八〇年代を通じて、ハウジング研究者の間で理論に対する関心が高まった。このことがきっかけとなって、同書の不備な点について、私自身、理解できるようになった。同僚のステファン・シュミット (Stephan Schmidt) の研究が、こうした観点の触媒となった。彼は、スウェーデン国立建築研究所に移った直後に同書を読み、健全な懐疑主義の精神にもとづき、計量分析をもちいて住宅保有形態と福祉国家の関係を検証した。その結果は、彼にとって少々意外だったかもしれないが、私の知見を裏付けるものだった (Schmidt, 1989a)。

シュミットの研究に背中を押されて、この問題にふたたび取り組む決心がついた。そして、一層の理論的發展を求めて明確な分岐論を打ち出すことを目指した。その直接の成果は、まず研究所のセミナーで、つぎにブリストル先端都市研究院で発表された長文の論考である。それは、のちに三つの論文となり、さらに大幅な改訂が加えられて本書の第1章、第4章および第7章となった。このとき私は、新し

い著書の主張に内在する理論的・認識論的問題について、より重点的に取り組む必要があること、そして分岐論に関する問いもまた、研究の全体からすれば部分的なものでしかないことに思っていた。つまり、そのとき書こうとしていた書物がバランスを欠いたものになりつつあること、そして、ハウジンク研究における理論の現状という、より根本的な問題に取り組む、重要な書物が生まれつつあることに気づいた。そこでは、分岐論もまた、ひとつの具体例にすぎない。こうしてできあがった本書は、当初計画していたものからはかけ離れたものになった。もつとも、最終的に私が書いたのは、研究のうち優先すべき部分だけであり、もともとのプロジェクトはまだ進行中である。

本書の大部分は英国で一九八九年六月から一九九〇年五月までのあいだに執筆されたが、この期間を通じて研究所から助成を受けた。研究所からの支えがなければ本書を執筆することはできなかったらう。執筆期間の初めの頃、私はアバディーン大学社会学科に拠点を置いていた。一九八九年八月、プリストル先端都市研究院に、一九九〇年四月にサセックス大学都市地域研究センターに移った。これら三つの研究機関すべてに対し、本書執筆のための便宜を与えていただいたことを感謝する。

また、私の研究に関心をもち、各章の草稿にコメントをくれた同僚たちに感謝したい。アバディーンのマーク・シュックスマイス (Mark Shucksmith)、ノーマン・ストックマン (Norman Stockman)、ニック・ウィリアムズ (Nick Williams)。プリストルのクレイグ・ガーニー (Craig Gurney)、レイ・フォレスト (Ray Forrest)、アラン・ニューリ (Alan Murie)。サセックスのジェームズ・バーロー (James Barlow)、ピーター・ディケンズ (Peter Dickens)、サイモン・ダンカン (Simon Duncan)、ピーター・ソーンダース (Peter Saunders)。また、以下の方々も、親切にも草稿にコメントをくれた。サセックス大学のマイク・ハーロー (Mike Harloe)、ウィーン大学のウォルター・マッツネッター (Walter Matznetter)、ロンドン・

バートレット建築学校のステイーブ・メレット (Steve Marrett)、フィンランド・トゥルク大学のハンヌ・ロナヴァーラ (Hannu Ruonavara)、スウェーデン国立建築研究所のボー・ベントソン (Bo Bengtsson)、ラーズ・ノード (Lars Nord)、エヴァ・サンドステット (Eva Sandsteth)。さらに、ステファン・シユミットとレイ・フォレストは最終稿が完成する前に全体を読み、コメントをくれた。彼らのコメントは、広範囲にわたる改稿の参考となった。

人数があまりに多く一人一人の名を記すことはできないが、研究所では、同僚との議論から多くのものを得た。とりわけステファン・シユミットには恩義を感じている。数えきれないほど議論し、その内容はときに広範囲に及び、アイデアを展開する上で計り知れないほどのヒントを与えてくれた。このため、彼の考えと私の考えを区別することが難しいと感じることもあった。意図しないまま、結果としてアイデアを拝借してしまっている部分があったとすれば、許しを請いたい。さらに、一九九〇年一〇月に研究所で開催された、第8章の第二稿についての社会学セミナーの参加者は、多くの建設的で有益なコメントをくれた。

最後になるが重要なこととして、研究所からの施設面での技術的・物質的支援に感謝の意を表したい。さらに重要なこととして、研究所の事務スタッフからはかりしれない支援についてもお礼申し上げる。とくに、英国での長期滞在が可能になったのはハッセ・ヨハンソン (Hasse Johansson) の理解と寛容のおかげである。そして、図書担当職員はすばらしい相互貸借制度を提供してくれた。さらに、秘書のビルジッタ・ベック (Birgitta Beck) とグニラ・ブルーム (Gunilla Bloom) は文書と図表のコンピュータ入力とフォーマット作業を、きわめて迅速かつ正確に進めてくれた。





## はじめに

ハウジング研究は伝統的に、住宅難がどのくらい深刻で、どのくらいの規模で生じているかを把握することに関心をよせてきた。たとえば、過密、不衛生、そして世帯に対する住宅の不足などである。戦後はとくに住宅不足に注目が集まり、過密と衛生の問題は後景にしりぞいた。世帯人数と住宅数の推定は、住宅不足に対応するための世帯形成の先送りから生じる「潜在的」世帯数の推定とともに、不足数の総量と、その解決に必要な新規建設戸数を決定する際に不可欠の評価基準をなしている。それらは、ながらくハウジング研究の出発点となってきた (Cullingworth, 1960: ch. 1; Donnison, 1967: 33-5)。このようなハウジングへの実践的で政策志向のアプローチは、事実上、ハウジングを住宅単体、あるいはときに「シェルター」と呼ばれる建造物として定義してゐる (Abrams, 1964)。

しかし、「住宅階級 (housing classes)」という、ハウジングについてのはじめの理論的な概念が導入されたレックスとムーア『人種・コミュニティ・紛争 (Race, Community, and Conflict)』(Rex and Moore, 1967)の刊行を契機に、概念や理論に対する関心が研究に浸透しはじめた。それにともない、ハウジング研究は徐々に、しかし確実に変容を遂げてきた。このような動向は、一九七〇年代におけるマルクス主義理論、とりわけアルチュセール派の構造主義から、そして引きつづき一九八〇年代に起こったウエーバー

主義者たちによる反応から、すくなくからぬ刺激をうけている。四半世紀近くにわたる緩やかながら確固とした発展を経て、一九九〇年代に入ると、変化のペースは着実に加速しつつある。

とはいえ、ハウジング研究の理論的発展は初步的な段階にとどまっており、依然として不十分な点が目立つ。多くのハウジング研究が抱える課題の核心は、それらが住宅政策と住宅市場に対する視野の狭い関心しかもっておらず、より広範な争点群を無視していることである。ハウジング研究は、いまだ他の社会科学における議論や理論から著しく孤立している。いま必要なのは、社会科学への統合を進めることである。

しかし、のちに別の文脈で述べるように、認識における変化を、社会構造における変化と切りはなしで理解することはできない。一九八〇年代中盤から、多くの欧州諸国で、ハウジングに関する教育・研究の制度的インフラが驚異的なスピードで整備されてきた。研究教育センターが設置され、ポストが新設され、ハウジングについての国際的な査読つき学術雑誌が創刊され、定期的な国際ハウジング会議が組織され、つい最近には、欧州ハウジング研究ネットワーク (European Network for Housing Research) が設立された。われわれが目当たりしているのは、きわめて短期間のうちに、課題を設定し、研究を選別しうる独自の権限体系を備えた、新しい学術領域<sup>フィールド</sup>としてのハウジング研究が確立されつつあるという事実である。つまり、ハウジング研究の内部で、教育研究ポストへの指名、学習課程内容の設計、競争的研究資金における研究計画書の採択可否の決定、学術雑誌における論文の掲載可否の決定、書評欄にとりあげる本や書評担当者の決定、等々がなされるようになった。

こうした発展は危険をともなっている。制度は研究を硬直化させる効果をもつ。視野を「学派」の内側に固定し、変革や回避はもちろんのこと、疑問をもつことすら容易でない伝統を継承してしまう。さ

らに恐ろしいのは、すでに慢性化している、幅広い社会的関心からのハウジングの孤立を、このような制度化がさらに助長してしまう可能性があることだ。ハウジング研究の制度化は、狭量な専門主義にもとづく研究領域の形成を容易に正当化する。そうになると、社会全体の文脈の外側で、幅広い社会科学の議論および論争から切りはなされた状態でハウジングを扱うことが可能になってしまふ。あまりに速いスピードでハウジング研究における権限体系の制度化が生じていること、そして、抽象化された経験主義と政策べつたりの研究の蔓延が、批判的で再帰的リフレクシブなハウジング研究の出現を抑圧すること、すくなくとも遅らせてしまうことを、私は懸念している。

この課題の緊急性と重要性ははかりしれない。ハウジング研究は、対象先行型の領域の一つである。こうした領域では、社会全体から切りはなされた非再帰的な経験的研究におちいりやすい。それは、多くの他の「領域」、たとえば教育、交通、そして保健とも共通する特徴である。なかには、とりわけ教育（「についての」）研究がそうであるように、概念化の水準が低い状態のままに制度化が進み、社会科学のなかでも停滞した分野にとどまっているものもある。他方で保健のように、いまや伝統的な制約から自身を解き放ちつつあり、社会科学において占める位置とみずからの焦点について、より広範で理論化された理解をもつようになった領域もある。みずからの研究主題の基盤についての深く徹底した評価を欠いたまま、高度に制度化された局面に移行するとすれば、ハウジング研究は悲惨な結末を迎えることになるだろう。

したがって本書は、まさにこの時期でなければ生まれなかつた書物である。その目的はハウジング研究の理論面での発展をうながすことにある。この点に關してもっとも急を要する課題は、他の社会科学と関連づけながら、一つの領域としてのハウジング研究の現状を明らかにすることである。